

水産の窓

サバ類の漁況と秋漁の予測

4 - No. 15
令和4年9月22日
茨城県水産試験場

1. 北部まき網サバ類水揚量の推移と資源状況

北部まき網によるサバ類水揚量は年によって大きく変動してきましたが、H25年に加入尾数が極めて多い卓越年級群が発生し、以降は20万トン前後で推移しています(図1)。近年の加入状況は、H30年にも卓越した加入がみられるなど、資源状況は良好に推移しています。しかし、資源増加の一方で、水揚量はH29年以降減少しています。これは、マサバの資源増加に伴い回遊範囲が沖合へ拡大したことによって、日本沿岸域にとどまる期間(漁期)が短くなっているためと推察されます。

今年の北部まき網による1~8月のサバ類水揚量は3.5万トンで、前年(8.7万トン)を大きく下回っています。1月は犬吠~鹿島沖に漁場が形成されたものの水揚量は少なく、2月以降はマイワシ主体の操業となり、サバ類を対象とした操業は低調となっています。なお、道東沖でのまき網の操業は6月27日から始まりましたが、マイワシを対象とした操業であり、9月中旬現在サバ類はわずかに漁獲されたのみです。

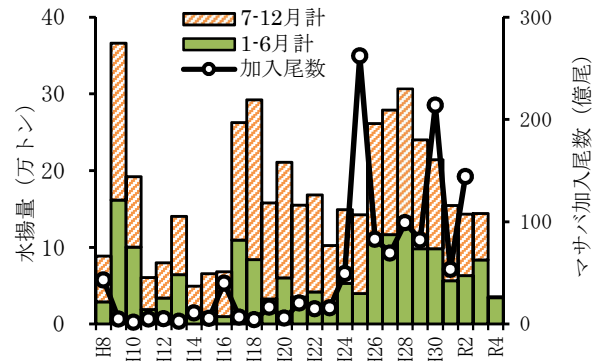


図1 北部まき網サバ類水揚量とマサバ加入尾数
(令和4年水揚量は8月分まで)

2. 秋漁の漁況予測

①水揚量

北部まき網による1~6月のサバ類水揚量と9~12月のサバ類水揚量の間には正の関係があります(図2)。今年1~6月の水揚量は3.4万トンでしたので、この関係に基づくと今年の秋漁は6.7万トンとなり、水揚量は前年を上回る(前年5.8万トン)と予測されます。

②漁期

北部まき網による9~12月の秋漁におけるサバ類の漁獲状況を整理したところ、漁期前半には主にゴマサバが、漁期後半には主にマサバが漁獲されていました。また、秋漁が本格化した日(初漁期:9~12月の累計水揚量の20%を達成した日と定義)はゴマサバ資源量が多いと早く、マサバ資源量が多いと遅くなることが明らかになりました(図3)。近年はゴマサバ資源量の減少傾向、マサバ資源量の増加傾向が継続していることから、秋漁の本格化は11月下旬以降となる見通しです。

③魚体

魚体については卓越年級群のH30年級(4歳魚)が昨年から本格的に漁獲され始めており、R2年級(2歳魚)も比較的多く漁獲されていることから、マサバ体長22~36cm(体重100~550g、2歳以上)を主体に、18~27cm(50~200g、1歳魚)も漁獲されると考えられます。H25年以降に生まれたマサバは成長が遅くなっているものの、昨年12月に漁獲されたマサバ(体長30cm以上)の粗脂肪量は平均15%程度あり、今秋も脂ののったおいしいマサバが期待できると考えられます。

(回遊性資源部 荒井)

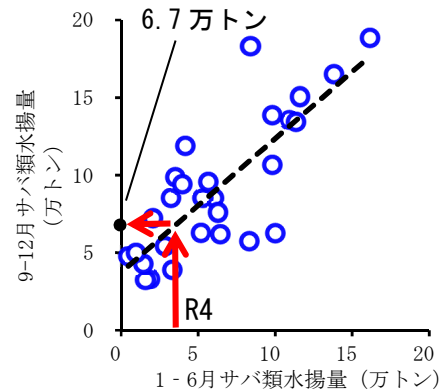


図2 北部まき網1~6月サバ類水揚量と9~12月サバ類水揚量の関係

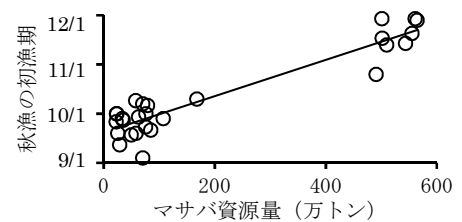
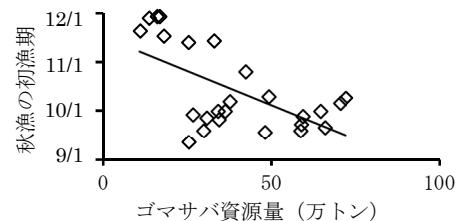


図3 秋漁の初漁期とゴマサバ資源量(上段)、マサバ資源量(下段)の関係